

親密圏としてのメディア空間

—携帯サイト「リアル」にみる中高生の振る舞いをめぐって—

山守 伸也（関西大学大学院）

1. 報告の目的

本報告は、近年の中学生・高校生を中心に、主として携帯電話を介して用いられる「リアル」というインターネット上のサイト（ツール）を事例に、彼ら／彼女らの親密圏¹のありようを描き出すというものである。

中高生の親密圏について検討するにあたっては、まず学校について捉えておく必要がある。中高生にとって学校は、家族に次ぐ主要な親密圏の一つである。一日の半分以上、身を置く場所であり、数年間ほとんど変わらぬメンバーと同じ時間を過ごすことから、否応なく親密性が育まれ、学校という装置からもそれが促される。その意味で学校は紛れもなく主要な親密圏であるが、他方でその「揺らぎ」も指摘される。校内暴力やいじめ、学級崩壊、あるいは友人関係の希薄化などを引き合いに、学校が親密圏としての役割を担えなくなっていることと論じることはもはや容易である。

その学校を基礎とした関係性からの逃避先として、しばしば持ち出されてくるのがメディア空間（とりわけインターネット、ケータイなどの電子メディア空間）である。メディア空間はこれまで、学校での関係性とは異なる匿名の他者と、新たに親密な関係性を築くことのできる場として描かれてきた。

ところが、ここ数年の中高生らのメディア利用のあり方をみると、必ずしもそうは言えなくなっている。学校外の異質な他者を求めるのではなく、メディア空間においても既存の同質的な関係性を持続しているのである。彼ら／彼女らにとってメディア空間は、既存の関係性をベースとした「親密圏」と化しているわけである。本報告では、そんな現代の中高生の親密圏のありようを携帯サイト「リアル」を通して、学校とメディア空間を対置させながら、描き出すことを目的とする。

2. 学校という親密圏

伊藤茂樹（2002）によると、1970年代から80年代にかけて、学校における生徒文化は「向学校

文化」と「反学校文化」へと分化され、1990年代以降、それらがさらに細分化されることで、学校外の「若者文化」の占める位置が拡大したという。つまり、学校の持つ機能が弱まって行ったというわけだ。校内暴力などの集団・組織的な逸脱行動も、学校の持つ力が大きかったがゆえに起こり得た反発・抵抗の表れであったと捉えられる。

近年では、反学校・脱学校というような動きに代わって、個人に対する同調圧力が強まり、場の「空気」を読んで相応しい「キャラ」を演じることが求められると言われる（原田 2010）。学校は対立や抵抗がなくなった反面、「空気」の重圧が支配する歪な親密圏となっているわけである。

3. メディア空間へのまなざし

学校の持つ機能が揺らぎを見せ始めた頃、その「学校外」の新たな場としてメディア空間が取り上げられるようになる。ポケットベルを通じて友人を作る「ベル友」、メールのやり取りを通じた友人の「メル友」、さらには「出会い系サイト」と呼ばれる異性交際を目的としたサイトの登場など、見ず知らずの他者とメディアを通して親密になるという関係性のあり方が、当時の若者に固有の現象として注目された。富田英典（1997）は、そんな「見知らぬ人」でありながら「親密な」関係性にある者を「インティメイト・ストレンジャー」と呼んでいる。ただ、そのようなメディアを媒介とした親密な関係性のあり方は、とかく否定的に捉えられてきたきらいがある。ネット依存による現実との隔絶、ネットで自殺仲間を募る「ネット心中」、出会い系サイトを契機とした殺人などの事例をもとに、その危険性が強調されてきた。

このような特性とは対照的なのが、近年の中高生の振る舞いである。

4. 「リアル」にみる親密圏

メディア空間は学校での関係性から解放されるべく求められたものであったが、近年の中高生らは、学校での特定の関係を維持・強化すべくメディア空間へと向かっている。

そのことはブログなどからも見出せるものであるが、「リアル」と呼ばれるツールでは、そこに一定の距離を含むことで、「空気」からの解放という

¹ 親密圏は「具体的な他者の生への配慮／関心をメディアとするある程度持続的な関係性」（齋藤編 2003）と定義されるが、本報告では中高生を対象とするため、とくに友人関係を基礎とした関係性の領域を指すことになる。

役割も果たしていると言える。以下では「リアル」をめぐる幾つかの特徴を挙げながら考察していく。

(1) 行動の実況

「リアル」とは、「リアルタイム」の意味で、ブログのようにある程度まとまった文章を「日記」として提示するものではなく、主としてケータイから短文で頻繁な更新をするインターネット上のツールで、「リアルタイムブログ」とも呼ばれる。その最大の特徴が、行動の実況と呼べるものである。その都度の行動を「今〇〇した」などと、一日複数回の書き込みを行い、それを特定の友人間で確認し合うというものである。

多くが、「ホームペ」と呼ばれるケータイ向けホームページや「プロフ」という自己紹介ページにリンクするかたちで併用されている。それらを互いにリンクしあうことで関係を可視化し、他の友人とは異なる親密な友人であることが明示される。

その友人は、同じクラスや同じ部活動である者など、少なくとも同じ学校に属する友人である。高校生では、同じ出身中学である他校の者も含まれるが、ネット上で知り合った友人などは含まれていないのが特徴である。あくまでも「学校」を契機とした関係性が前提となっているのである。

(2) 適度な距離

互いに閲覧し合うものでありながらも、多くの「リアル」にはブログのようなコメント機能はなく、あってもほとんど利用されていない。あくまでも一方的に書き、一方的に見る、というスタイルである。それゆえ閲覧に対する過剰な反応は要求されず、書き手側も過剰に「空気」や他者を意識する必要がない。関係圧力を回避し、一定の距離を保ちながら、実況される行動の確認により、互いの日常に近づくことができるわけである。

(3) 相互確認

「リアル」が一方的に書き、一方的に見るというものであるとは言え、記述の中には行動の実況とともに、特定の人物に向けたメッセージも見受けられる。それはあくまでもその人物が閲覧しに来なければ伝わらないものである。直接相手に伝えたいのであれば、電話やメールといった直接伝わりやすい手段を選ぶはずであるが、あえて「リアル」に書き込んでいるわけである。頻繁に見る機会がなければその記述が意味を持たないことを考えると、利用する中高生たちにとって、特定の友人間において互いの「リアル」を確認し合うことは当然のこととなっているのだと言える。つまり、彼ら／彼女らにとって、「リアル」という「メ

ディア空間」は、友人関係という親密な関係性において、欠くことのできない場であり、「リアル」という名の「親密圏」であると捉えることができる。

(4) 閲覧制限

「リアル」は原則として公開で行われているため、「友人」でなくても閲覧可能になっている。ただ、なかには閲覧に際してのパスワードが付けられた書き込みもある。パスワードを知っている関係とはごく限られた親密な友人関係である。「リアル」は元々ごく限られた友人同士で閲覧し合うのが一般的であるが、そのなかでも特定の人物のみ見せるメッセージを使い分けて書き込んでいるのである。公開された「リアル」のなかに、言わば操作的に「親密圏」を作っているわけである。

ここでは紙幅の都合で具体的な事例を挙げることはできないが、ここで示したものは、多くの「リアル」に共通して見られる特徴である。容易に一般化はできないものの、現代の中高生たちは、このような「リアル」という場において、学校を契機とした既存の関係性を、ネット空間に持ち込むことで、独自の親密圏を作り上げ、適度な距離感を持って、緩やかにかつ濃密な関係性を紡ぎあげているわけである。

5. 結論

本報告では、「リアル」という携帯サイトを例にして、現代中高生の親密圏のありようを考察してきた。既存の親密圏としての学校は、「教育」という名のもとに親密な関係性を育む場ではなく、親密な関係性の契機としての役割を担っている。その限りにおいては、学校はきわめて重要な意味を持っていると言える。その関係性なしには「リアル」は成立しないのだから。他方、メディア空間は、中高生にとって新たな関係性を形成する場ではなく、あくまでも学校を契機とした関係性をもち込むことで構成される、彼ら／彼女らにとっての重要な「親密圏」となっているのである。

《参考文献》

- 原田曜平, 2010, 『近頃の若者はなぜダメなのか』光文社
 伊藤茂樹, 2002, 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』70: 89-103.
 齋藤純一編, 2003, 『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版
 富田英典, 1997, 「インティメイト・ストレンジャーの時代」富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦『ポケベル・ケータイ主義!』ジャストシステム, 14-30.